



## 耳納風土記⑭ 袋野<sup>ずいどう</sup>隧道

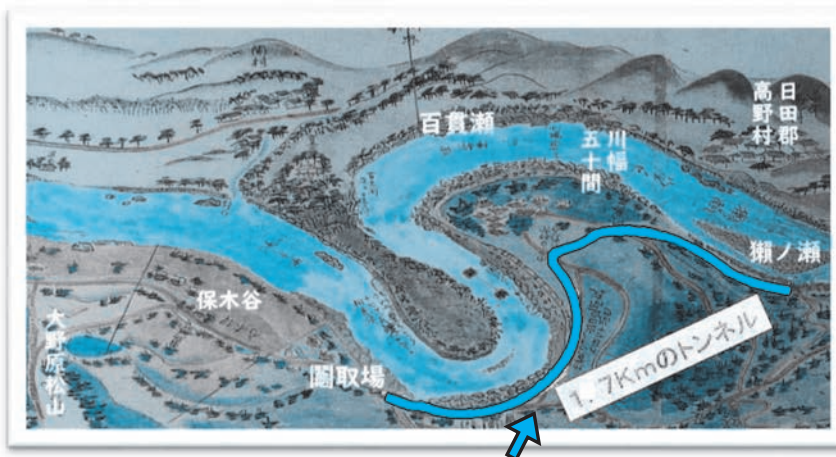
前回、前々回と紹介した五庄屋と大石長野水道ですが、実はこの工事の恩恵を受けられなかった村もありました。大石堰で取水された水は大石・山春地域を通過するだけで、この地域の人々は水田耕作に堰の水を利用できずにいたのです。現在は豊かな田園が広がる大石・山春地域ですが、このような田園風景がどのようにして広がっていったのか、今回は筑後川のもう一つの堰と隧道の話をご紹介します。

筑後川の氾濫原でもあった大石・山春地域は一度雨が降ると水害が起こり、日照りが続くと干害が起こるといった過酷な地でした。できたばかりの大石長野水道は自分たちの村々の下流を流れ、貧しい生活が改善することはありませんでした。これを見かねた吉井の大庄屋、田代重栄<sup>しげよし</sup>は水路を開いてこの地域に水田をつくることを決意します。重栄は大石長野水道の開削にも多大な援助・助言を与えた人物でもあり、この状況を見過ごすことはできなかったのでしょうか。息子の重仍に家督を譲り袋野用水建設に専念した重栄は、何度も調査を繰り返し、豊後から筑後の国境である原口村袋野<sup>うそ</sup>瀬の瀨に隧道を掘る計画をたてました。重栄は有馬藩に事業の計画を説明し、工事の許可を願い出しました。藩はあまりに大胆な計画に驚き、普請奉行<sup>にわたのもしげつぐ</sup>・丹羽頼母重次に判断を任せました。丹羽は重栄の計画に納得し、寛文12年（1672）6月、工事の許可と工事費用として銀33貫目300匁（約2億円）を貸し与えました。



田代重栄肖像画

瀬の瀨は固い地盤で、これを掘り進めなければなりません。この工事は百姓や大工の力でできるものではなく重栄は山陽山陰の金山から坑夫を数十人雇い入れ、鍛冶屋を呼び寄せ<sup>つるはし</sup>鶴嘴<sup>ののみ</sup>や鑿<sup>のみ</sup>をつくらせました。現代に比べ当時の測量技術は未熟なものであり、大まかに川沿いに沿って掘り進め70~90mおきに外から横穴を掘って明かり窓を造り方向と高さを確認していくという気の遠くなる作業を繰り返して工事を進めていきました。光も届かない洞窟の中でサザエの殻に火を灯し、鶴嘴で一寸刻みで進む難工事はなんと9ヶ月で完成します。全長970間（約1.7km）の隧道は将棋の駒形に切り込まれ、牛馬が通れるほど広いものでした。工事に携わった坑夫らは「これは後世、鬼神の仕業としか思われまい」と言い、重栄の偉業が忘れられないよう隧道出口の岩に田代家の家紋と肖像を刻み故郷に帰っていきました。中にはそのままうきはに留まる坑夫もいたようで、その子孫が後世、山北石工として活躍したようです。



筑後川絵図一部加工（青のラインが袋野隧道）



将棋駒の形に掘削された  
隧道内部の様子

隧道は完成しましたが思ったほどの水量がとれません。重栄は、隧道工事により藩から借りた金を使い果たし9貫目（総額5～6億円ほど）を手出ししていましたが、隧道へ取水できるように筑後川に石堰を造ることを決意し、家を売り私財を投じて第二期工事に取りかかります。石堰を築く場所は急流で知られた瀬の瀬で、流れが強く水が深く当時は「総毛立ち魂消ゆる」と形容されるほどでした。重栄は巨石すら流す川底に木を用いて枠を作り石の流出を防ぎながら積み上げようと計画を立てますが、人夫らは恐れをなし誰も川に入ろうとしません。重栄はこのとき満60歳の年齢ながら自ら川に入り、枠を作ったといひます。石堰は延宝4年（1676）に完成し、その後重栄から息子・重仍が事業を引き受け、1679年頃に袋野用水が完成しました。灌漑面積は70ヘクタールで大石・山春地域は豊かな農地へ変貌しました。重栄は袋野用水完成後、用水が見渡せる大石村に隠居し余生を過ごしました。百姓達は重栄の偉業に感謝し、重栄没後は坑夫らが刻んだ石像を神と祀り田栄神社を創設し、3月14日の命日には村民総出で田栄神社に詣で、御社前に神酒を振る舞い、道行く人さえ接待してその徳を偲んだといひます。この行事は明治まで200年以上続いたそうです。



重栄を祀った田栄神社

袋野堰は昭和28年に起きた大洪水で決壊し、隧道の取水口は夜明ダム建設に伴い500m下流に移設し当時のものは川に沈んでいます。隧道の出入口付近はコンクリートで保護されていますが、その中は江戸時代に掘られた生々しい鶴嘴の跡を現在も見ることができます。用水を7つの地区へ配分している七つ溝と呼ばれる箇所もあり、現在の袋野用水は約400ヘクタールの農地に水を供給し続けています。

### ～久留米入城400年記念協賛事業～

#### 北筑後文化財フェスタ「近世の筑後川流域」展開催のお知らせ

令和3年（2021）は、久留米藩初代藩主有馬豊氏が久留米城に入城してから400年の節目にあたり、久留米市では企画展や関連イベントなど様々な記念事業を展開しています。

毎年、文化財愛護思想の向上を目的に、北筑後各市町村が連携して開催している文化財フェスタですが、今年はこの記念事業に関連して「近世の筑後川流域」と題したパネル展を久留米市で開催します。近世の有馬藩領またはその周辺地域の歴史に着目して、一揆や藩境対立などの「争い」、隠れキリシタンや修験道などの「信仰」の2つを大きなテーマとして、各市町村がそれぞれの概要を分かりやすく解説したパネルを展示します。

うきは市の展示では「宝暦一揆」について紹介します。宝暦一揆とは、宝暦4年（1754）に久留米藩が窮乏の打開策として8歳以上の男女全員に人頭税を課したことに端を発します。その規模から全国で五指に入るほどとも言われる大一揆となり、最終的には一揆の指導者とされた者が大勢処刑されるという悲惨な結末となりました。パネル展ではその全容を紹介します。期間中にぜひ足をお運びください。

会場：久留米市 六ツ門図書館展示コーナー（くるめりあ六ツ門5階）

期間：令和3年9月17日（金）～11月3日（水）

開館時間：10：00～18：00

休館日：毎週水曜日（祝日は開館）、第4木曜日 入場料：無料

主催：北筑後文化財行政連絡協議会

問合せ先：うきは市生涯学習課文化財保護係 ☎0943-75-3343 FAX0943-76-4724

久留米入城400年記念関連情報について詳しくは、下記ホームページをご覧ください。

<https://www.city.kurume.fukuoka.jp/1080kankou/2015bunkazai/3060bunkaevent/400.html>

